

農業土木を 支えてきた人々

新

と
渡べ
戸つと
傳おう
翁

水 野 好 路*

I. 三本木原と十和田市

青森県は、地形的に奥羽山脈により二分され、西側を津軽地域、東側を南部地域といい、歴史的にもそれぞれ津軽藩、南部藩により統治されていた。南部地域は気象的にも太平洋からの冷涼な偏東風のため、3～5年ごとに冷害に見舞われるため領民は苦勞を強いられ、白米を食べられるのは、盆、正月の2回程度だったといわれている。

この南部地域のはぼ中央に、東西 40 km、南北 32 km にわたる広大な三本木原台地が位置している。現在の十和田市を中心に三沢市、六戸町など2市4町に広がる地域である。この地域は、八甲田山の噴火によりできた噴出火山岩第三紀火山灰土壌から成る台地のため、井戸を掘っても水も出ず、樹木も生えず、ただ荒蕪たる平原であったといわれている。

天明(1780年代)のころ、諸国を見聞した橋南溪は、「東遊記」のなかで、「夫南部の地は廣大無辺にして、何れの国といへども此地の広きに比すべき所なし。殊に七の辺に三本木台という野原あり。唯平々たる芝原にて、四方目にさわるものなし。北東西およそ2日路、南北半日路程ありと云い、その間人家もなく樹木一本も見えず、実に無益の野原也。雪中には此辺の人といえども四方に目印なければ方角知れず、5、7日も往来やむ事ありとかや………」と記されており、当時の状況をうかがい知ることができる。

この広蕪たる野原の開拓に安政2年(1855年)新渡戸傳、十次郎父子が着手し、苦節4年稲生川の開削に成功して以来、現在この稲生川は、三本木台地の動脈として水田約7,000 haの用水を供給している。

この開発の中心地である十和田市は、三本木村、三本木町、三本木市と発展し、昭和31年十和田市と改称され、人口56,000人、国立公園十和田湖への表玄関口として、活気あふれる田園都市として、広々とした緑と太陽の街と

して近隣町村の経済・文化の中核的役割を担っている。

II. 新渡戸 傳

新渡戸傳は、寛政5年(1793年)花巻に生まれ、幼名を縫太と名付られ、文武の道を学び22才で結婚し長男十次郎を得たが、傳28才の時父維民^{これたみ}は花巻城藩政改革の頭領として、藩主よりのとがめにより60石の知行半地没収のうえ、北郡川内(現青森県下北郡川内町)に流される悲運に遭遇した。ここにおいて傳は、家計を支えるため安野屋幸文と名を改め、小間物商を始め、後に材木商となり下北の「ヒバ材」、さらに十和田山に入り木材をきり出し、奥入瀬川をいかだで流して、八戸、鯉の港より遠く江戸、大阪、加賀方面までに販路を開いた。その間20有余年大いに隆盛を極めるまでになったが、三本木原の開拓構想は実にこの永年にわたる十和田山への往来の途上において着想されたものといわれている。そのため、材木商として上京の折には、各地の産業を広く見学している。

ことに開墾事業の実施調査を行い上水、開田の方法を研究するとともに、その道の権威者を歴訪するなど、開拓に対する研さんを積んで帰省している。

天保9年(1838年)傳45才の時はじめて幕府の巡見使役に任官し、その後、田名部(現むつ市)、野辺地の山奉行となり、さらに三本木原を調査する機会に恵まれた。

傳56才には、南部藩勘定奉行まで昇進し、藩財政の建直しのため開拓、海岸防備等の業績を残している。

III. 傳、三本木原開発に着手

天保年間の大ききんに加え幕府への献木等のため、藩財政は極度に窮迫し、たび重なる凶作の対策として嘉永5年(1852年)8月、傳は南部藩家老の命を受けて、測量者、穴ゼキ普請者などを連れ、かねてからの宿願であった三本木原開拓の調査を行い、その概要を把握して帰藩したが、藩財政窮迫のため発願が容れられなかった。

しかし、その翌年、藩では寛政(1790年代)以後召しか

* 青森県農林部八戸平原世帯(よまさり)ダム対策室(みずの こうじ)

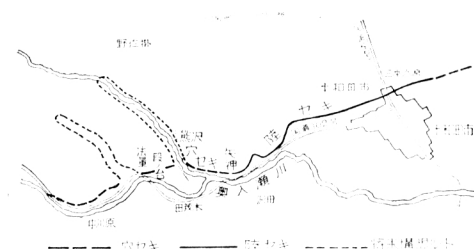


図-1 三本木原開拓構想と実績

かえの土に対しては、10カ年間家禄の3分の1を給し、奉公を全うした者に限り、再度土分に取立ること、同様に新田の開墾を願い出て成功した者は土分にするとする藩財政建直しのための一大改革、いわゆる「10ヶ年土」制度が設けられたため、新地開田熱が起り、ここに三本木原開拓計画も進み同志も集まり、出資者も盛岡、花巻、五戸、八戸と各方面から集まった。

安政2年(1855年)8月1日、傳58才の時ようやく三本木原開拓計画も許可されることになり、伝は「三本木原新田御用懸」となり、傳多年の宿願であった三本木原の開拓が実現する運びとなり、傳一行は8月21日三本木に到着した。

上水計画は、奥入瀬川からの取水のため熊の沢～矢神の1,412間(2,540m)、法量～段の台の900間(1,620m)の穴ゼキ(トンネル)と陸ゼキは矢神～三本木までの3,400間(6,147m)という遠大な構想である。

三本木到着後、傳は最大の難関である2カ所の穴ゼキのうち、熊ノ沢～矢神間の工事にとりかかるとともに、傳は三本木原から太平洋までの一帯をくまなく調査して開拓の構想を練り、日夜事業の進行に努めていたが、安政4年、藩の命により不本意ながらも勘定奉行として、再度江戸に赴くこととなった。このため嫡子十次郎が新たに「三本木原新田御用懸」となり、その子七郎とともに三本木に来て、父傳の偉業を継ぐこととなった。

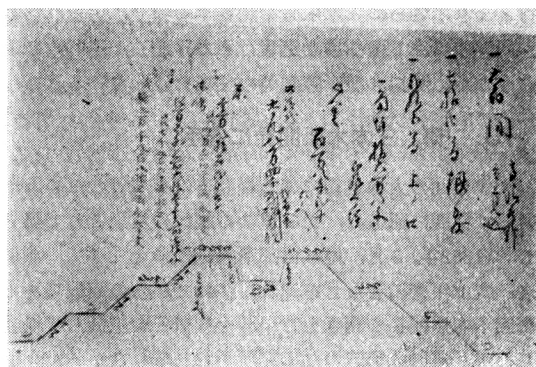


写真-1 当時の測量図面

当時の測量機械は、水丁規、方位器、コウ配器、梵天(標識)が主なるものである。水丁規あるいは桶に水を入れて水平をとり、方位器で各方面を見て梵天をたて間紐で測定し、目標に鉋屑などをつけて測量したといわれ、むしろ夜の方が、提灯を標柱に下げて行方方法が能率がよかったともいわれている。

穴ゼキは、幅6尺、高さ5尺で当時爆薬もないこととて鉄槌、鑿、てんばづる(ツルハシの一種)、中づる、ばんづるが主なもので、岩盤の状況や山ひだの形状をみて掘進するため、穴ゼキの中は屈曲蛇行しており非常な困難を極めた。穴ゼキの掘りかたは、上下流の双方からと横坑から各班の分担により掘り進み、真中で約2尺の食違いで辛い下流側が低かったといわれている。当時の測量器具、技術、また掘削工具で、両端からさらに横坑(現在その根跡が何カ所も見られる)から掘り進め誤差も少なく完成したことは現在の技術をもってしても驚嘆に値するものである。

さらに矢神より下流の陸ゼキ工事を進めたが、京の館(十和田市八郷付近)では3丈5尺(約12m)も掘り下げるなど非常な苦心を強いられた。

その間、傳は勘定奉行の職も解かれ、すぐ三本木に帰り十次郎とともに工事に精魂を傾け、苦節4年、安政6年5月4日に竣功を見、熊ノ沢から上水を行く人の住めない、水のない三本木に奥入瀬川からの清流が流下し、三本木原を貫流、ついに三本木原の大動脈となったのである。この時の模様を十次郎は、

「茶屋6軒の百姓婆共6人連れ、蕎麦粉何れも一升餅に入れ、使づれ折柄訪ねきたり、何れも開発の出事候を喜び、老いたるを悔い、後に繁盛なるべきを見兼ねべきを嘆き申すぞ尤もなる。総じて此の度、高清水まで上水致候処、5月4日鳩、雁は水をあび、せきれい、川雀は逍遙し、川魚、岩魚は水中に遊び、牛馬の野飼いは川の辺に水を呑み、又御百姓ども小児等まで老若男女別なく

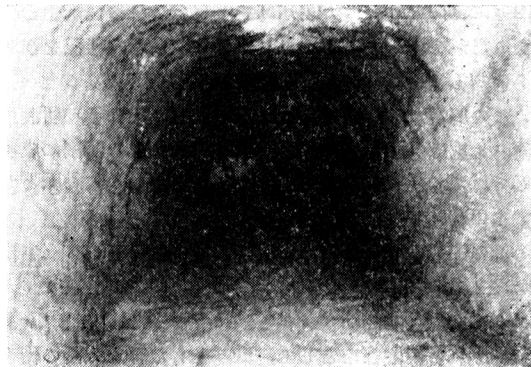


写真-2 熊の沢～矢神間の穴ゼキ



写真-3 現在の稲生川幹線用水路（十和田市内）

水に入り実に何れも水なきところに大水来り候故人間は宜なることなるに禽獸まで右の次第、誠に天然の理に随いしことならんと、別して大慶いたしけり………」と述べている。

翌万延元年(1860年)8月26日、南部藩主利綱公がこの三本木におもむき、開拓の模様をつぶさに視察して傳・十次郎にその労をねぎらっている。その際、人工陸ゼキを「稲生川」、橋には「稲生橋」、町には「稲生町」と開拓を祝って藩主が名付けたものである。

この上水完成は、もちろん傳一人の力のみでなく、子十次郎、孫七郎の父祖三代にわたる努力とともに、傳の開拓計画に賛同した多数の協力者、さらに各方面の後援者の総力の結集といえよう。

IV. 傳父子の産業の開発と街づくり

傳、十次郎はさらにその後大小の水路を掘り、新田を開き開拓者の生活安定を図る一方、各地からの専門家を招いて農事指導を行い、養蚕、植林の普及に、また瀬戸物、鋳物、製革の方法を教えており、凶作に備えるためバレイショ、サツマイモの栽培も進めている。

また三本木駅の経営に当たるとともに、街道筋に東西南北12町四方とした碁盤目の区画の整然とした都市計画を作り、本道路8間、裏通り6間としたもので、これにすべて水路を沿え、南北に防風林を備えるなど、文化的・衛生的はもちろん防火用水まで配慮したもので、地方都市としては珍しい存在であり、学界でも高く評価している。

三本木地域は、南部駒の主産地であることから、三本木に駒市場を開設するなど街の発展に努めた結果、多くの人々も集まり開拓も軌道に乗ったので、民生安定のため、稲生神社、澄月寺、理念寺等を建立している。これらは都市計画に基づいての新駅経営で、その実現にはとくに十次郎の苦心が並々ならぬものであったといわれている。

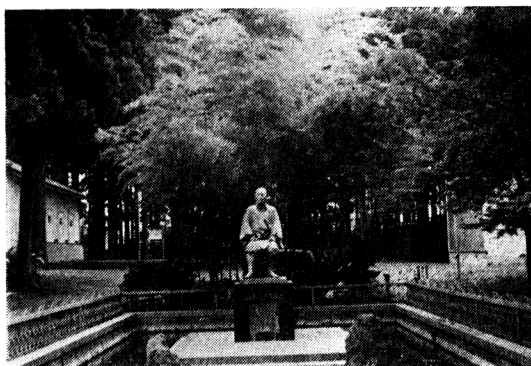


写真-4 太素塚記念館前の新渡戸傳翁の像

V. 傳、十次郎の死

安政6年、稲生川上水完成の翌年すなわち万延元年(1860年)、初めて米45俵を収穫して、新駅三本木は喜びにわきたった。三本木付近の開拓に曙光を見た傳は、かねてからの着想であった^{ももいし}百石町から三沢市に至る一帯の木の下平をはじめ、十和田市深持から七戸町方面にわたる台地の開墾計画を立てた。これは十万石という大構想であったが、資金調達困難な財政下にあったため、その対策として十次郎は藩内の絹を税として取上げ、それを海外に輸出してその収益の一部を開拓資金に充当しようと建築したことに端を発して蟄居を命じられ、それが元に病床に伏す身となった。その後誤解も解け罪赦されたがついに、慶応3年(1867年)12月24日、48才の若さをもって盛岡で逝去した。

十次郎の死は傳にとり実に晴天のへきれきで、この開拓の大構想も着工半ばに中止の止むなきに至った。

かくて、明治となり傳は七戸藩の大参事に任じられ、藩政の一新をはかるとともに、さらに三本木原の開拓に力を注ぎ、この中止した大構想計画を国営事業として実施するよう民部省に請願するなど奔走しているうち病を得、開拓の大構想をいだきつつ、明治4年(1871年)9月27日、79才にして大往生を遂げたのである。

傳は、生前すでに墓域を太素塚と定め、ヒバ、杉、松等300本の植林をし、広漠たる平原にやや小高い丘陵を終えんの地として選定していた。三本木原にクワ入れして17年目、幾多の感慨を胸に刻みながら、やがて実る新田300haの黄金の波を夢見、理想郷三本木原の土となり、三本木原、十和田市およびその周辺市町村の開祖として守護神となったのである。

十和田市は、はじめて上水した5月4日を記念し、前後3日間市祭として、毎年感謝の祭典として太素祭にぎやかに行われ、傳の墓前に開拓の喜び、感謝の祈りを

捧げる人が後をたたない。

この偉業を後世に伝えるため、十和田市はゆかりの太素塚境内に昭和40年3月、新渡戸記念館を建て、傳をはじめ、嫡子十次郎、嫡孫七郎の三代にわたる開拓資料、遺品のほか、十次郎の三男すなわち七郎の末弟に当り、国際親善に大きな足跡を残した日本初の農学博士であり法学博士であった新渡戸稲造の蔵書、遺品などを保存している。

VI. 傳なき後の開拓と現在

傳、十次郎父子の太平洋岸までの十万石開田という大構想は、十次郎、傳の死後、孫七郎がその遺志を継ぎ、事業の進行に専念し、明治17年4月開墾会社が創立され、明治39年には稲生川も太平洋岸まで延々30 kmにも及んでいたが、開田は300 haに過ぎない状況にあった。

傳の念願であった国営事業による開拓は、地方民挙げての陳情運動の結果、ようやく昭和の時代に入り、十和田湖の水を利用し、2,500 haの開田と、3,500 haの開畑を行う国営三本木原開拓建設事業が、第70帝国議会上

程され、昭和12年3月8日、わが国第2番目の国営開墾事業として発足する運びとなり、百年にして開祖新渡戸傳、十次郎、七郎父祖三代にわたっての夢が実現し、今日、十和田市、三沢市など2市4町にまたがる水田約7,000 haと、畑7,000 haは本地域の主産業として、確たる地位を確保している。

さらに現在は十和田市を中心とする2市6町にまたがる農地7,500 haを受益として、水田6,600 haと畑900 haの畑地カンガイの計画で、その水源の確保とこの稲生川の幹線用水路の整備を行う計画で、新渡戸父子が稲生川の上水成功後120年という記念すべき去る昭和53年に国営相坂川左岸土地改良事業として着工されている。

国営三本木原開拓建設事業所の初代所長であった溝口三郎先生の「三本木原開拓記念碑文」に刻されている予言どおり、不毛にして魔の三本木原はさらに緑の大地へと躍進しようとしている。

参考文献

- 1) 三本木開拓建設事業成績書
- 2) 新渡戸傳翁と三本木原、十和田市開拓のしおり

[1979. 6. 4. 受稿]